

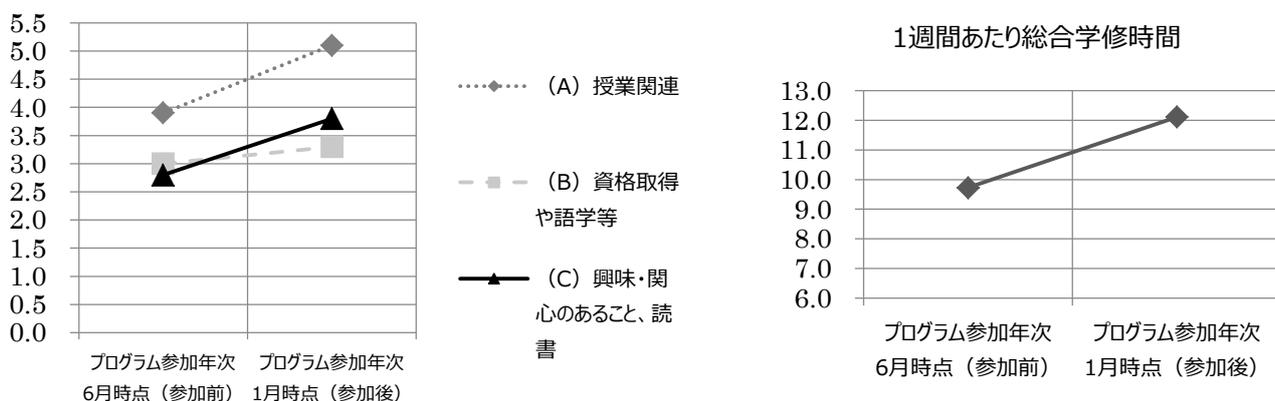
新潟大学の事例

対象プログラム：「企業課題探究型 長期・有償型インターンシップ」 対象学年：1～3年生

■目的 平成26年度より試行的に正課外で実施している「企業課題探究型 長期・有償型インターンシップ」に、平成27年度に参加した1～3年生9名を対象に、プログラムの教育的効果を検証する。同プログラムでは、企業での実習内容・大学での学修支援プログラムともに学生の主体的学修姿勢につながるような工夫を重ねており、参加前と参加後で学生にどのような変化があったかを探る。

■方法 対象となる9名のプログラム参加時の学年は、1年生が1名、2年生が5名、3年生が3名である。プログラム参加前（平成27年6月）と参加後（平成28年1月）の2時点において、学修時間を問う設問から9名の平均値を示した。また主体的な学修の定着の様子を検証するため、プログラム終了から半年後の平成28年7月に追跡調査を行った。追跡調査では、すでに就職活動に入っているプログラム参加時の3年生3名を除いた6名を対象とし、インターンシップ・プログラムから得た学びが各自の学修スタイルにどう活かされているかを、ヒアリング調査で確認した。

■結果と考察 (A)(B)(C)のいずれにおいても学修時間の平均値は上昇し、1週間あたりの総合学修時間としては9.7時間（参加前6月）から12.1時間（参加後1月）へと約25%増加した。さらに追跡調査の対象となった6名について調べたところ、半年後の平成28年7月時点での1週間あたり総合学修時間は18.4時間と大幅に増加していた（その6名のみでの平均値は、参加年次6月：9.9時間、参加年次1月：10.7時間）。



また学修スタイルに関するヒアリング調査では、プログラム終了から半年が経過した時点でも、下記のような行動の変化が多くの学生に共通して認められた。これらは主体的学修姿勢が具体的な行動に現れた例と言える。

インターンシップの経験からの学び		行動に活かされた具体的な場面
他者との協働	協働して成果の質を上げる意義や方法の理解	グループで課題に取り組む際の積極的貢献 議論を参加者共通で視覚化するためのホワイトボード等の活用 レポートで読み手を意識した文章を作成
目的意識と振り返り	常に目的や求められる達成度を意識し、リフレクションによって自己点検するという行動パターンの実践	出された課題の意図を掴もうとする姿勢が定着 通学時間などを活用した1日の達成度の振り返りが習慣化
自主学習	問題解決に必要な知識不足を実感	幅広い知識を身に付けるための積極的な読書・新聞の閲覧 今までの専門分野と異なる副専攻の授業の履修

長期インターンシップの 教育的効果

2016/3/18 第22回大学教育研究フォーラムでの発表資料より一部抜粋

◇事例の概要

■ N大学 「企業課題探究型 長期・有償型インターンシップ」

※一連のプログラムは正課外で実施

【企業にて】

Ⅱ <8月中旬～9月下旬>

Ⅳ <10月～1月（企業により調整）>

- **3週間（15日間）**の実習
- 1企業に学生**2～3名**が参加

- **3～4ヶ月間**の実施
授業の履修状況をふまえ、**週2日**程度の実習
- 週1回、参加学生全員での合同ゼミ

担当の社員の方とともに、事業課題に即したミッションに取り組む
※実習の一部は有給での雇用

【大学にて】

Ⅰ <6月下旬～8月上旬>

Ⅲ <9月下旬>

Ⅴ <1月～2月>

- 目標設定、チームビルディング
- 問題解決のプロセスについて学ぶ
- 受入れ企業研究 等

- 活動の振り返り、学びの言語化
受入企業を交えてダイアログ
- 後半に向けた目標設定

- 企業からのアセスメント
- 半年間の学びを振り返る
- 成果報告会

2015
年度

参加学生 **9** 名 / 学年別内訳

1年生	2年生	3年生
1名	5名	3名

受入企業 **4** 社 / 業種

- A社：人材サービス業
- B社：食品製造業
- C社：印刷業
- D社：小売業（スーパー）

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■ 下記13の項目に対して、インターンシップ中の自分自身の行動・周りの環境がどの程度当てはまっていたかを5段階で回答（自己評価）

		内容		内容	内容
1	報告・連絡・相談	報告・連絡・相談など、自分から社員の方へのコミュニケーションが十分にとれていた	8	自主的な学習・調査	ミッションに取り組むのに必要な知識や情報を得るために、自分から積極的に学んだり調べたりした
2	社員からのフィードバック	社員の方からは、自分たちの活動に対するフィードバックを十分に受けることができた	9	テーマ・事業内容への興味関心	取り組んでいるテーマや受入企業の事業内容に対して興味関心が深まった
3	インターン生同士の議論・相談	よりよい成果を目指すために、（自社の）インターン生同士で十分に議論・相談等ができていた	10	自分が定めた行動指針の遂行	インターンシップ開始前に自分で決めた「行動指針」を十分に実行できた
4	顧客との接点	インターン生や社員の方以外の、その企業の顧客やイベント参加者等との接点があった	11	PDCAの実践	活動日報で日々振り返ったことを、次からの行動に活かすことができた
5	他者からの学びと実践	他者の考え方や行動でよいと思ったものを積極的に吸収し、実践した	12	達成経験	実習の中で、ささいなことであっても達成感を感じられるような経験をした
6	目的の意識	自分たちが期待されている企業からのミッション・その目的を常に意識して取り組んだ	13	達成を不安に感じた経験	実習の中で、業務や目標が自分(たち)にできるかどうか不安を感じる経験があった
7	仕事における時間意識	1つの仕事にかかる「時間」や「期限」を意識して取り組んだ			

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■参加者9名の回答の平均値

(5、よく当てはまる 4、まあまあ当てはまる 3、どちらともいえない 2、あまり当てはまらない 1、全く当てはまらない)

	action-1	action-2	action-3	action-4	action-5	action-6	action-7
	報告・連絡・相談	社員からのフィードバック	インターン生同士の議論・相談	顧客との接点	他者からの学びと実践	目的の意識	仕事における時間意識
I、8-9月(前半)	2.64	3.64	2.91	3.18	3.45	3.00	2.82
II、8-9月(後半)	3.82	4.36	4.09	2.73	3.82	4.00	4.09
差① (II - I)	1.18	0.72	1.18	-0.45	0.37	1.00	1.27
III、10-1月	3.67	4.22	3.78	3.89	4.33	4.00	4.33
差② (III - II)	-0.15	-0.14	-0.31	1.16	0.51	0.00	0.24

- I、8-9月(前半) / 左記期間の自身の行動を回答 (9月下旬の集合研修時)
 II、8-9月(後半) / 左記期間の自身の行動を回答 (9月下旬の集合研修時)
 III、10-1月 / 左記期間の自身の行動を回答 (1月下旬の集合研修時)

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■参加者9名の回答の平均値

(5、よく当てはまる 4、まあまあ当てはまる 3、どちらともいえない 2、あまり当てはまらない 1、全く当てはまらない)

	action-8	action-9	action-10	action-11	action-12	action-13
	自主的な 学習・調査	テーマ・ 事業内容への 興味関心	自分が定めた 行動指針の遂行	PDCAの実践	達成経験	達成を 不安に感じた 経験
I、8-9月 (前半)	3.00	3.82	3.18	3.36	3.45	3.36
II、8-9月 (後半)	3.64	4.36	3.91	3.82	4.27	3.36
差① (II - I)	0.64	0.54	0.73	0.46	0.82	-0.00
III、10-1月	4.44	4.78	3.44	4.11	4.44	3.44
差② (III - II)	0.80	0.42	-0.47	0.29	0.17	0.08

- I、8-9月 (前半) / 左記期間の自身の行動を回答 (9月下旬の集合研修時)
 II、8-9月 (後半) / 左記期間の自身の行動を回答 (9月下旬の集合研修時)
 III、10-1月 / 左記期間の自身の行動を回答 (1月下旬の集合研修時)

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

結果

要因

- I (8-9月前半) から II (8-9月後半) にかけて、「よく当てはまる」割合が大きく上昇（1以上）

「報告・連絡・相談」
「目的の意識」「仕事における時間意識」
「インターン生同士の議論・相談」

- ・初めての慣れない企業実習受入担当者から学生の「振る舞い」に対して繰り返しフィードバック

- II (8-9月後半) から III (10-1月) にかけて、「よく当てはまる」割合が大きく上昇（0.4以上）

「他者からの学び・実践」
「顧客との接点」「テーマ・事業内容への興味関心」
「自主的な学習・調査」

- ・全員でのゼミ活動の継続
- ・業務の中で行った顧客へのアンケート調査等
- ・興味関心の高まり
- ・インターン期間の終了が迫り任せられた業務を完遂しようという意識

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■学生の振り返りレポートより

Action-6「目的の意識」

常に「目的」を意識する

一人でひたすら考え続ける時間がたくさんあった。自分の中でアイデアを出すうちに、考える作業がアイデアを出すためだけの作業になってしまうことが何度もあった。なぜ今、自分がこの作業をしているのか、目的を見失わないよう意識して作業を行うようになった。

Action-6「目的の意識」

「大学で学ぶことの意義」の再認識

「なぜそれを学ぶのか」という目的を考えるようになった。大学は自分の学びたい分野をより専門的に学べる場所であると同時に、様々な人との関わりや日々の生活の中で、自分とじっくり向き合い、考えることができる。それが大学で学ぶ意義だと思う。

大学では、自分が興味を持った分野を専攻する中で、より「知りたい」「分かってほしい」と思う探求心が養われていくのだと思う。これは社会に出ても同じことで、「この会社がより良くなるには何が必要なのか」「自分は何をすればよいのか」と試行錯誤することに繋がっていると感じた。

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■ 学生の振り返りレポートより

Action-3・5「インターン生同士の議論・相談」「他者からの学びと実践」

他者とともに1つの成果を目指す経験

複数の人間でPlanやCheckを行うと様々な考えを考慮しながら練ることができる。それを社員の方からのフィードバックでまた修正していくことで、客観的に見て自分の考えに矛盾はないか、論理が飛躍したり分かりにくかったりしないかといったことを考えていく重要さを感じた。

仕事をチームで行うと考えた時、誰か一人の気持ちが沈み、心が折れてしまいそうになると、それはチームの崩壊に繋がるかもしれない。その時、チームの一員の「一緒に頑張ろう」といった言葉が非常に大事であると思った。悩んでいる、落ち込んでいる人を一人にするのではなく、それを皆で共有し助け合うことが「チームワーク」を生み出す原動力なのではないか。

課題を行う際は相手に見てもらうものであることを意識し、資料データのタイトルから中身まで分かりやすいものを作るようになった。

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■学生の振り返りレポートより

Action-11「PDCAの実践」

PDCAサイクル・仮説検証の手順

インターンで経験したPDCAサイクルの一連の流れを、今後、自分が行動する時の基礎としていきたい。特に仮説立案時の「根拠」を常に意識して行動したい。

「現状把握→目標設定→仮説設定→対策立案・実施→効果確認→反省と今後の課題」という仕事の流れは、社会人になってから通用するのではなく、学生（大学の学び）であっても応用がきくものだと思う。考えるテーマが変わっても考える手順は同じ流れで、汎用性が高いと思った。

その他

「書く」ことの重要性

集めたデータから仮説を立てる際に、チームで出た仮説をホワイトボードに書きながら話し合った。各々の仮説を書き出してキーワードにまとめると、それらを別の視点から見ることができ、突破口が開けるといった経験をした。また言葉にすることで自分の考えの弱点やあいまいさが見えた。「新たなアイデアが生まれる」「あいまいさが発見できる」という2つの点から、書くことは大切であると思った。

◇教育効果についての調査：行動、興味関心の変化

■ 学生の振り返りレポートより

Action-7「仕事における時間意識」

スケジュール管理、大学生生活に見通しをもつ

ノートにスケジュールを書き、眺めてみると、今までは数日先のことしか考えていなかったが、数週間先、数か月先のことまで見通せるようになった。また書き込んでいくと余白が生まれ、そこにアイデアや振り返り等を書くようになり、頭が整理されるようになった。

Action-9「自主的な学習・調査」

積極的な読書、社会を知る

読書を積極的に行うようになった。インターンで知識不足を感じた経験から、大学の勉強だけでなく読書することで幅広い知識を身につけようという意識が芽生えた。今は月に2冊のペースで読書することを目標にしている。読書によって様々な考え方や知識はもちろん、今社会では何が問題になっているのか、なぜ問題なのかということも見えてくるようになった。

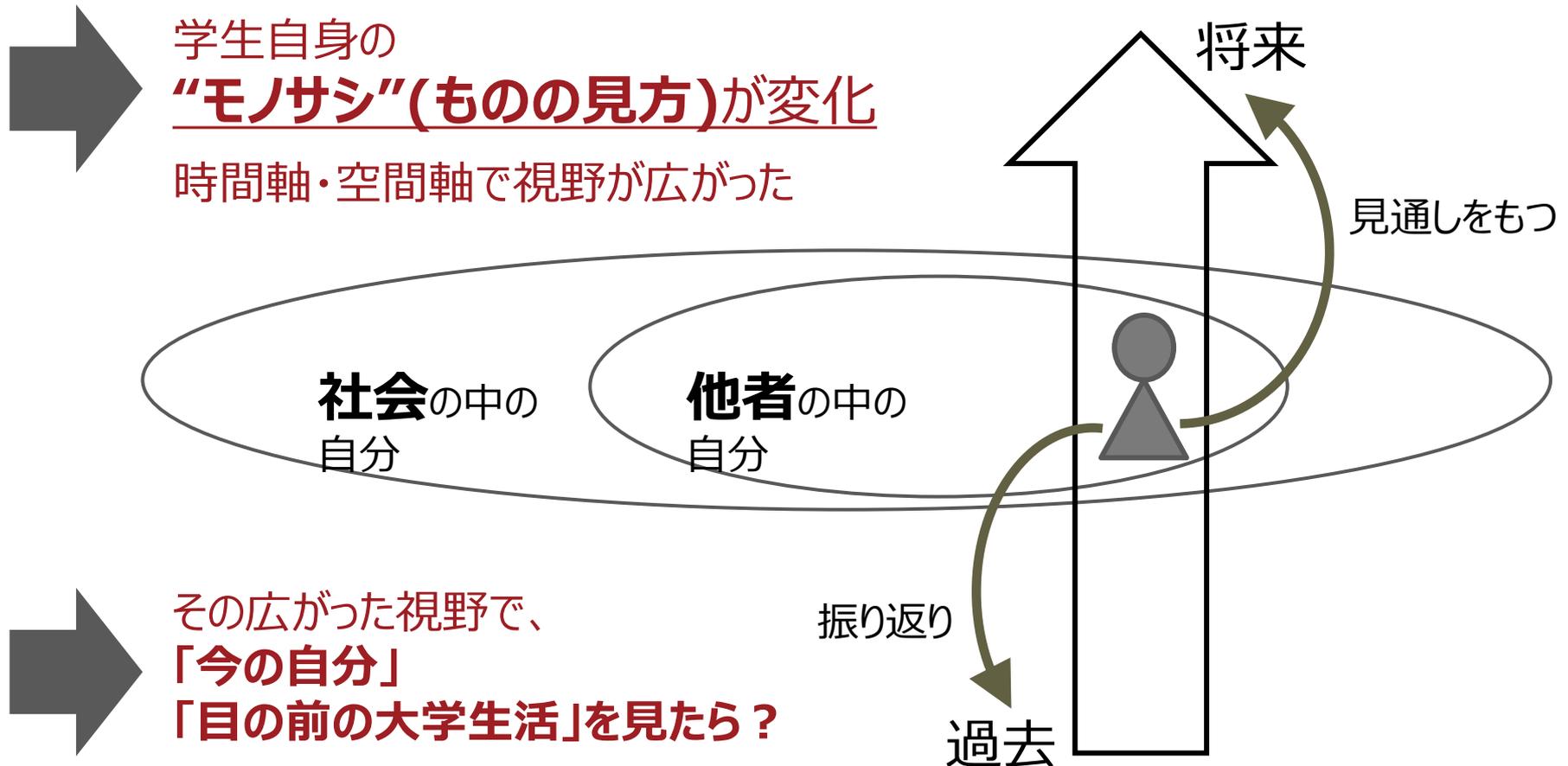
Action-11「PDCAの実践」

自らを振り返る習慣の定着

常に自分を振り返ることが習慣づいた。高校の時は周りと自分を比較して劣っていたら努力するという取り組み方だった。しかしインターンシップの活動日報等を通して、自分を定期的に振り返り、以前の自分と比べて出来ていない点・成長した点を知り、行動に活かせるようになった。

◇教育効果についての調査：まとめ

■学生の振り返りレポートより／具体的な行動の変化

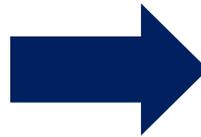


◇教育効果についての調査：まとめ

“教室から社会へのパラダイムシフト”

今までの大学の中とはまったく違う環境に、ある程度長期で身を置いて、
その組織のミッション・問題意識に沿って行動し、
与えられた役割と期待のもとで、期限までに物事を成し遂げる
「何が評価されるのか？」「どんなことに価値があるのか？」

大学生活とは違う
“モノサシ”の中に
入り込み、
一定の期間、
没頭してみる



今まで
疑うことのなかった
大学での学び・経験の
見え方が変わる